

けれども、うわばみひめ 蟒姫あさめしまえに云わせれば「そんなモノは朝飯前よ」である。
「彼女は金切声です。いけませんか？」〈番外編〉

灰薔薇 黒汽

〈巻〉 朗読ノ美女

ぼうじつぼうごく
某日某刻、とある駅前付近の歩道にて。

白いローブを羽織って、フードを深く被った如何にも怪しげな人物が歩いて来る。
ローブには、金色の文字のような凶形のような複雑な柄の装飾が施されている。

右手には、2匹の蛇が巻き付いた装飾の付いた、身ノ丈みのたけよりも長い杖を持っており、
左手には、白い革表紙かわびょうしの分厚い本を開いた状態で持っている。
そして、それをぶつぶつと読み上げているのである。

深く被ったフードからは、白く美しい顔と黄金の長い髪が覗のぞいている。20代前半
くらいの年齢の女性である。

彼女は、駅前の人混みの方をチラと見てから、開いた本へと再び目を落とす。

すると風が吹いたせいであろうか、パラパラと頁ぺーじが捲めくられていき、ある頁ぺーじでそれは
治おさまった。

けれども、蟒姫に云わせれば「そんなモノは朝飯前よ」である。

それから、杖に巻き付いていた蛇の装飾がユラユラと動き出し、互いに口を開いて毒牙を見せ合う。

装飾の金属の蛇なのだから、そのような事はあり得ないはずであるが、現実になのである。

グリモワール

「108冊の【Grimoire・魔導書】、魔導集約されしは一冊。白ノ書・ラフェル・第7

2巻・648章・【蜜の搾取】」

白いローブを羽織った美しい女性は立ち止まり、先程よりも大きな声にて本の朗読を続ける。

すると、彼女の首から下げているネックレスの宝石部分が薄つすらと青白く光り出す。

それは宝石ではなく、青い液体の入った小瓶であった。

そして、中の青い液体がポコポコと泡を立て始めた。

なんじ

「汝らは、盲目の羊に同じ。何が幸福で何が不幸かすらも分からぬまま、ただ快樂を

むさほ

くら貪り喰う、愚かで罪深い者ども……」

その声を聞き、目前の大勢の人が白いローブの女性の姿を見る。

そして、その内の目付きや人相の悪い者達が、特にその声に関心を持ったの様子。

「されども、邪悪で醜い強欲は蜜ノ味。汝らがそれを求めて止まないのであれば、この【狂おしい程の快樂】を与えん」

人混みの中から、目付きや人相の悪い者達だけがノソノソと、白いローブの女性の周りに群がってきて、彼女が朗読する美声に耳を傾ける。

「さあ、求めよ！ 我、汝らの異質な魂と引き換えに、汝らの望みを叶えん！」

そこまで読むと、白いローブの女性の首に下げられている例の青い液体の入った瓶は、ビシッ！ と、罅ひびが入って中身がポタポタと、本の開いた頁へと落ちた。

すると、開いたページに描かれている紋章のようなモノに、その青い液体は吸い込まれていく。けれども本は、青い液体で汚れる様子はなかった。

白いローブの女性を取り囲むようにして、如何いかにも悪そうな人達が十数人集まつていたが、彼女はその事に動揺どうようする様子もなく、更に朗読は続く。

「汝らが作り出しし【偽りノ血】は、確かに受け取り……我、開きし間、汝の願いを聞き入れん」

本の開いた頁がポーッと青白く発光する。白いローブの女性は、更に朗読を続ける。

「どんなに豪華な料理を口にしても、どんなに楽しい余興を見せられても、決して私の心は満たされない……。私は、あの夜の事を決して忘れられないの……。貴方が唯一

私だけを見てくれた夜だから……。貴方は、まるで飢えた獣のように私を求め、貪り喰むさぼ

うように一晩中、私を求めて快楽に溺れてくれた。けれども……。一夜が明けるとどう？ まるで私の事など覚えていないかの様子……。身分の違いがそうさせるのだろうけど、

けれども、蟒姫に云わせれば「そんなモノは朝飯前よ」である。

それは私には余りにも残酷な仕打ち……。嗚呼、あの女がイケナイのね？ うふふ♪
あの女は無様に泣き崩れ、私に命乞いをするのだけれど、そうすればそうする程に、
私の殺意は増す一方……。事が終わり、床に流れ出る血ノ海をびちやびちやと歩いてみ
る。気持ちが良い♪ 満たされて行く♪ これは、あの夜と同じだわーあ。うふ
ふ♪ こんな事、誰にも見られてはイケナイのに……。その恐怖が私を更なる快樂へと
誘うの……。あら？ 今宵は、その女を貴方は欲しいのかしら？ だーめ。それは私が
頂くわーあ。うふふ♪」

そこまで読むと、白いローブの女性の透き通るような青い眼は、血のように真っ赤
に色を変えた。

本編へ続く。